

特集 沖守弘 インド写真 データベース

データベースの 成り立ち

三尾稔 民博グローバル現象研究部

データベースには沖氏が一九七〇年代

半ばから二十年間にわたってインドおよびネパールで撮影した写真およそ二万点が収められている。一九七〇年代半ばといえど日本から海外への渡航者数が年間で百万人を越えはじめたところで（二〇一五年の海外渡航者数は一六二万人）、インドを訪れる日本人はまだ非常に限られていた時期である。

沖氏がインドに関心をもつようになったきっかけや取材対象の広がりについて



アーンドラ・プラデーシュ州の影絵芝居。撮影1990年代前半。（『知られざるインド 儀礼芸能とその造形』所収） [X0308388] Photo by F.M.Oki

写真の受け入れが打診されたのである。

民家、灌漑や農耕の技術など急速な社会変化のもとで姿を消したり、形態が変わったりしているものも撮影されており、時間が経ったからこそ価値が高まった写真もある。壮大な祭礼、美しい民俗画や工芸、衣装などに関する華麗な作品も多数含まれている。是非みんばくで受け入れデータベースとして公開する必要があると考えた。

沖氏との交渉の結果、特に思い入れの深いマザー・テレサに関するもの以外のすべてのインドとネパールの写真を寛大にもご寄贈いただけることとなった。取材の際参考にされた文献や地図、取材メモ、現地の協力者からの書簡などの関連資料も一括してご寄贈いただいております。こちらはアーカイブとして整理保存が進められている。

データベースの誕生

上記の交渉中からお宅にお邪魔したり、みんばくに足を運んでいただいたりして取材当時のエピソードについては何度も聞きとりを重ねた。こういった聞きとり調査や氏から提供された関連資料に基づいてデータベースの作成にとりかかった。

誰しも経験することだが、写真には自分が撮影したかったものや事柄以外にも多数の情報が写り込んでくる。たとえ画面には小さく写っていても、見る人

昨年春「沖守弘インド写真データベース」がみんばくの映像・音響資料データベースに加わり、この春にはその英語版が公開された。本特集では、沖氏に縁の深かった研究者のエッセイによって同氏とインドとのかわりの一端を紹介する。またデータベースの成り立ちや特徴を概説し、沖氏の写真の魅力やデータベースの活用術を解きあかす。



オディシャ州コナーラクの太陽神寺院。撮影1980年。（「Konarka」所収） [X0309257] Photo by F.M.Oki

では後のエッセイに詳しいが、氏は当時の日本では一部の研究者などを除きほとんど知られていなかったインドの同時代の民俗文化を積極的に撮影するようになる。これらの写真は展覧会や写真集で発表される一方、『季刊民族学』の特集を何度も飾っている。その意味で沖氏はみんばくの活動ともかわりが深かった。

写真と資料の受け入れ

沖氏は一九九六年の取材のあと病を得て、以降はインドでの撮影をおこなっていない。幸いご自身は健在だが、撮影後相当時間の経ったフィルムもあり、その保存や整理には頭を悩ませておられた。ちょうどそのころ、二〇一二年春に福岡アジア美術館で「魅せられて、インド。」展が開催され、氏の写真も展示された。この展示を企画担当したのが本特集にも一文を寄せている五十嵐理奈氏だった。沖氏は自身の写真の収蔵と整理保存について五十嵐氏に相談、彼女からみんばくでの

が変わればそれが貴重な情報になることもある。データベースは多くの利用者がアクセスして情報を引き出し、活用できてこそ意味がある。データベース作りではそれを念頭に、沖氏が主題として撮影した人、もの、こと以外にも写り込んでいる情報を極力拾いあげ、検索が可能になるよう心がけた。そのため、左図にあるようなキーワードを設けておき、写真を一枚ずつ精査して、キーワードにかかわる情報があればすべて記録するようにした。キーワードに収めきれない情報は具体的な事項名や祭礼名などとして別に記録した。

写真の精査と情報整理には基本的に筆者があたったが、筆者には到底わからない分野や地域の写真も多数ある。その場合は、同僚の応援を仰いだり、沖氏に助言をいただいたりした。作業にはみんばくの研究費のほか、筆者がかかわってきた人間文化研究機構「現代インド地域研究」プロジェクトの経費も活用した。小さく写っている建物や神像の名前がわからず、頭をかきむしりながら資料にあたったこともあり、データベース作成は文字どおり七転八倒の苦しみだったが、沖氏の叱咤激励もいただいていたなんとかすべての写真情報の読み込みを終えられた。二万点以上の写真すべてと対峙できたことはじつに貴重な経験で、多くのことを学べたと思っている。

情報整理と平行して、ご寄贈いただいたスライドフィルムはすべてデジタル化した。整理した情報とデジタル画像を関連づけるなどの技術的な作業はみんばくの情報課や関連業者の皆さんの協力によって迅速に進み、データベースは正式な受け入れから三年で公開に至った。この種のデータベースとしては異例といつていいほどの速さでの公開だったが、まだまだ改善や修正の余地はある。多くの方に沖氏の写真の魅力に触れていただくと同時に、気づいた点をフィードバックしてもらい、データベースの今後の発展を見守っていただければ幸いである。



データベースのキーワード検索用画面



ケララ州トリシュールのブーラム祭。撮影1986年。（『インド・祭り』所収） [X0300855] Photo by F.M.Oki

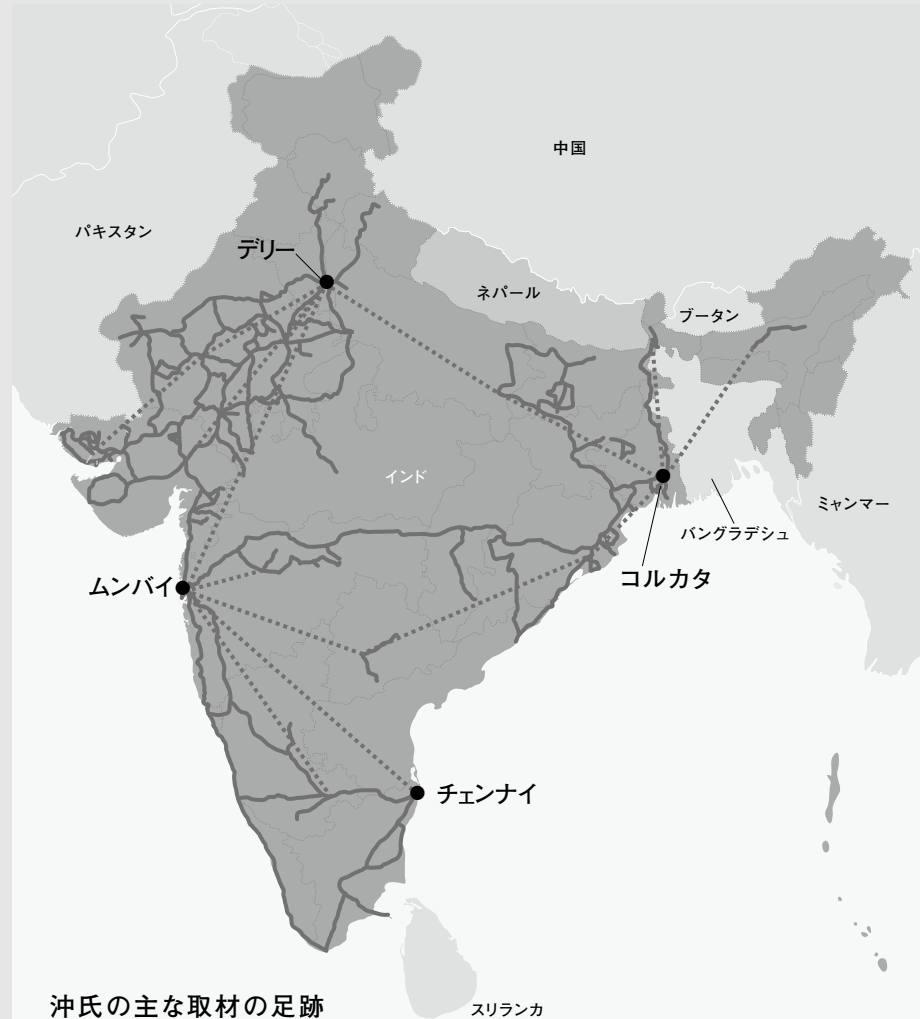
写真家 沖守弘の足跡

いからしりな
五十嵐 理奈 福岡アジア美術館学芸員

沖守弘氏は、社会の光と影のあいだを彷徨いながら、被写体に向き合ってきた写真家である。インドの祭りを空からダイナミックに、色鮮やかな婚礼衣装の人びとを日差しに負けぬ強さで写し出す。まばゆい光をカメラに収める一方で、ファインダーを覗かないもう片方の目は、社会の影となる厳しい現実を見ていた。



撮影に使用した沖氏愛用のカメラの一部



沖氏の主な取材の足跡

この地図は沖氏の取材記録をもとに作成しています。
なお地名表記は2017年3月現在のものです。

〈凡例〉

陸路 ————— 空路 ……………

日本からインドへ
一九二九年、京都の西陣に生まれた沖氏は、父親の影響でアメリカのグラフィック雑誌『ライフ』を愛読し、少年時代には二眼レフカメラで遊んだという。戦後、近畿大学に入学し、ユージン・スミス（一九一八―七八）の「フォト・エッセイ」という組写真でテーマを深く掘り下げる手法に感銘を受け、衰退する西陣織や大阪

の新世界の労働者など社会的なテーマを取材し報道写真家を目指した。おりしも、戦後日本の写真界は報道写真全盛のころであり、「丹平写真倶楽部」に所属して写真の腕を磨いた。そして、一九五四年に『祇園寸景』の写真で全日本学生写真コンクール特選を受賞したのを機にプロの道に進んだ。
その後、上京した沖氏は、消費社会が進む

一九六〇年代には商業写真を手がけながら、「二科展写真部」でも発表を重ねた。沖氏はこのころについて多くを語れないが、商品の魅力を引き出す手腕は、後に貧困のインドに隠されたハレの姿を見出すことへつながったであろう。ローマクラブが「成長の限界」が近いと世界に警鐘を鳴らすと、沖氏は高度経済成長期の日本から人口爆発の地、インドの Kolkata へ旅立つ。一九七四年、沖氏四五歳の時のことである。難民が押し寄せスラム化し

た Kolkata に強いショックを受けた沖氏は、かつての報道写真のようにこの町を撮ることはできなかったという。だが、ここで生涯心を寄せるマザー・テレサの存在を知り、その後 Kolkata を拠点にインド各地の取材をするようになる。

インドの魅力は日本へ
当時インドの地とは、「神秘のインド」であった。ヒッピー文化の流行を背景に、高度経済成長時代の反動ともいえるべき自然主義、精神主義的な生き方を象徴する地であり、同時に貧困と差別のイメージを負っていた。しかし、

沖氏が撮ったインドとは、こうしたインドではなかった。光り輝く姿を求めて壮麗な祭りを訪ね、人びとのエネルギーが最高潮に達する「ダイナミック・モーメント」（沖氏の言葉）をカメラでとらえたのである。それは、インドが見せたいインドの姿を代弁するものでもあり、日本が空前のインドブームを迎えた一九八八年の「インド祭」において展覧会



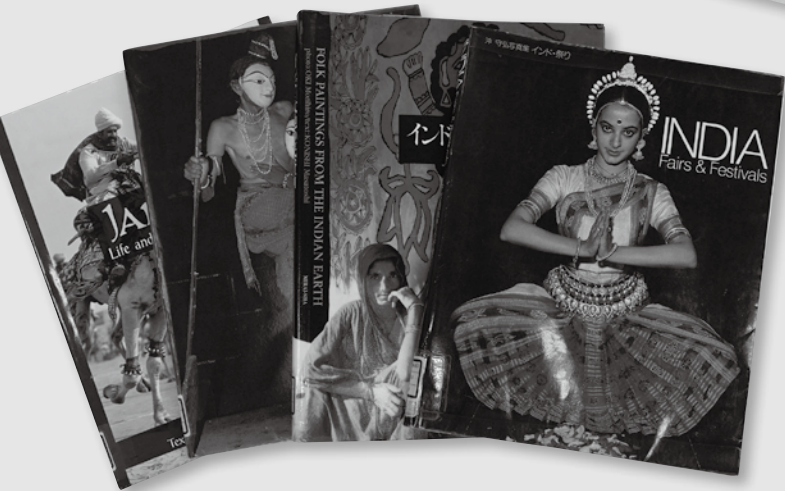
インド撮影旅の相棒、マルチ・スズキの四駆車と沖氏（1990年代前半）

と写真集の形で結実した。以後、四駆車に機材を積んでインドを駆けめぐる撮影が始まったのである。

こうして沖氏は、一九七四年から九六年まで、インドの光をカメラでとらえ何万枚もの写真に残した。しかし、光がつくったインドの影の姿は今もその胸にたたまたままである。

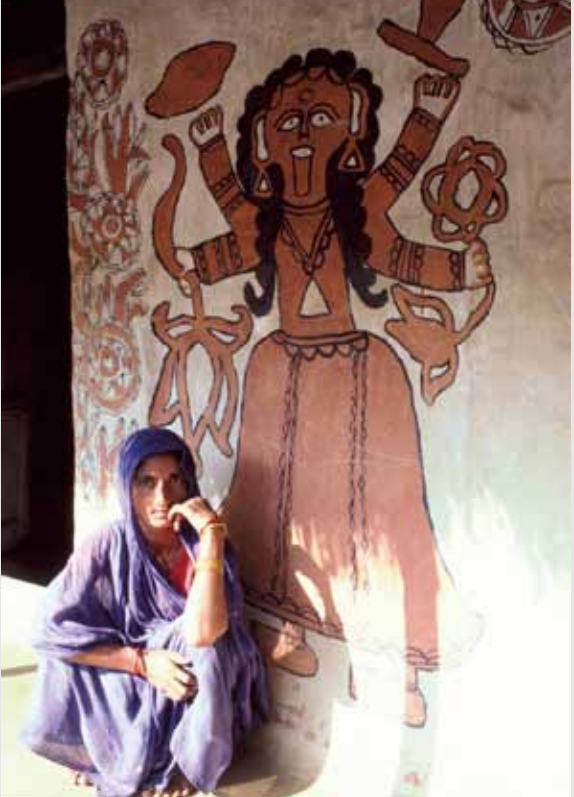


上：沖氏が写真や文章を寄せた『季刊民族学』（1980-93年）
下：沖氏が手がけた主な写真集



インドを撮る——写真家・沖守弘の冒険

小西正捷 立教大学名誉教授



ビハール州マドゥバニー様式的神話壁画。撮影年不詳。
〔インド・大地の民俗画〕所収 [X0306619] Photo by F.M.Oki

とであつたらう。

そして、心配されたとお
り、その後沖さんは体調を
崩され、病床に臥されるこ
ととなつてしまった。沖さ
んは一九七四年に初めてイ
ンドを訪れて以来、二〇年
余のあいだに八〇回以上も
同地を訪れ、ことに一九八
九年に小

型四駆の
ジープを
購入して
からは単

身深い山奥や密林、あるいは
熱砂の砂漠にわけ入り、場所
や村によってはかなり危険な
目にもあいつつも、精力的な
取材を続けてこられた。その
走行距離は、地球一周半にも
およぶ七万キロに達する。ま
た一九九六―七年には、癌の
手術直後なのに点滴のバッグ
を車椅子に吊したまままで動か



結婚に関わる一連の儀礼を行う新郎新婦。
ラージャスターン州ジャイスルメル。
撮影1980年代後半から90年代前半。〔“Jaisalmer”所収〕
[X0319654] Photo by F.M.Oki

沖フォト・コレクション

誰しもが歳をとると、身の回りにたまつたあ
れこれを整理せねばならないとのプレッシャー
にさいなまれることになる。沖さんもそうで、
これまでにインドで撮りためられた数万枚の写
真のうち、彼を世界的に有名にしたマザー・テ
レサ関係などを除く約二万枚のスライドのすべ
てがこのほど民博に寄託されたと聞いて、一抹
の安堵と寂しさを禁じえなかった。それはまた、
決断を下された沖さんにとってはそれ以上のこ

カトリックの修道女であるが、キリスト教の宗
派はもとよりヒンドゥー教の因習とも戦いつつ、
ただひたすらに神と人への愛から、死を待つば
かりの老人・病人、身寄りのない寡婦や幼児
を文字どおり抱きしめての介護にあたつた。沖
さんによるマザーの取材はやがて欧米や日本で
も知られるようになり、八〇年代に入ってから
はバルセロナのサグラダ・ファミリア聖堂やアッ
シジの聖フランチェスコ聖堂などからも招待さ
れて、ヨーロッパ各地での展示がなされた。

一方、沖さんが一貫して求めてやまなかつた
インドの真の姿は、これまであまり紹介される
ことのなかつた辺地・奥地の部族民の芸能や儀
礼、豊かな民俗造形のうちに求められた。一九
九四―九五にかけてのその精力的な取材は、
共同著作に向けての最終的な図版の選択とレ
イアウトなどを含めて、二〇〇年以上も前の一
七八一年に建つたというカルカッタのコロニア
ル様式のホテルに長期滞在しての、小西との連
日連夜の協議で実行された。わたしにとつても
思い入れの深い計四冊の共著(*)は、こうし
て成つたのである。

*『インド・大地の民俗画』未来社、二〇〇一年。『知
られざるインド 儀礼芸能とその造形』清流出版、
二〇〇七年。Konarka: Chariot of the Sun-God,
D.K.Printworld, New Delhi, 2007; Jaisalmer: Life
and Culture of the Indian Desert, D.K.Printworld,
New Delhi, 2013.

沖氏の写真がとらえたもの

三尾稔 民博グローバル現象研究部

ガドリア・ロハールはラージャスターン州の移動民で、ウシの引く荷車に家財道具を積みみ村々
をめぐり歩く暮らしを送っている。村はずれに数日間とどまり、農具の修理などの鍛冶仕事を
して生活の糧としている。言い伝えでは、かつてこの地方にあったメーワール王国の都がムガル
帝国に攻略されたとき、彼らは都が奪回されるまで二度と定住しないと誓つたという。彼らをヨー

ロッパの移動民ロマの祖先とみなす説もあるが、
確証はない。

写真はその一世帯が鍛冶仕事をおこなっている
ところ。画面中央で撮影者に話しかけているのが
一家の中心世代の男性で、左隣でもち運び式のふ
いごを回しているのがその妻だろう。男性の父母
は画面左端に座っている。鉄槌を振り下ろすのは
中央の男性の息子で、画面左に立つ若い女性はそ
の妻らしい。若夫婦は撮影と聞いてちよつとおめ
かしているようだ。後方には木と麻縄で作つた
ベッドで遊ぶ幼児も写っている。その脇には飲料
水用の素焼き壺が置かれ、荷車には寝具や調理具
が積んである。よく見ると壺の後ろに照明用のラ
ンプが取り付けられている。楽しそうな様子にと
もに彼らの質素な生活が一枚に収められている。

ガドリア・ロハールの日常を伝える写真は世界
的にも貴重だ。沖氏の写真の中心は華麗な祭祀
や工芸だが、庶民の多様な暮らしよりも多数撮
影されていて見るものを飽きさせない。



撮影年不詳 [X0317125] Photo by F.M.Oki

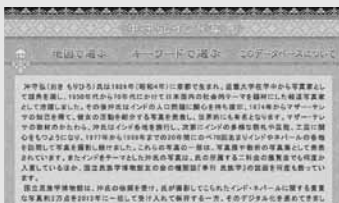
沖守弘インド写真データベース活用方法

三尾 稔 民博グローバル現象研究部

みんなのホームページのホーム画面下方にある「データベース」ボタンをクリックしてこのデータベースに入る

と沖氏の写真の特徴などを簡単に解説したトップページ

(<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/india/japanese/>)



図①

図上の州番号か州名をクリックすると該当する写真のすべてが順に表示される(図③はケララ州の例)。画面左上の番号か矢印をクリックすると写真選択画面が変わる。見たい写真をクリックするとより大きな写真と基本データが表示される(図④)。図④の写真をクリックすればさらに大きなサイズの写真が見られる。

キーワードでクロス検索

写真の効率的なしぼり込みに活用したいのがキーワード検索だ。トップページから「キーワードで選ぶ」をクリック(三ページのデータベース画面参照)。ここから複数のキーワードを組み合わせた検索ができる。例えば「西ベ

インド地図から検索

ひとつは地図から検索する方法だ。トップページ「地図で選ぶ」をクリックするとインドの州別地図画面が出る(図②)。沖氏が撮影をおこなった州は赤地に白抜きで示されている。沖氏は二二もの州や連邦直轄地(およびネパール)で撮影をおこなったこと



図②



図③



図④

ンガル州」「神像仏像など」「祭礼」を選び、「検索」をクリックすると三つのキーワードをすべて含む写真が表示される。表示された写真群からは地図検索と同じ方法で写真を閲覧できる。キーワードはひとつでもよいし、増やすこともできる。ただしソフトの制約で大項目のなかからは複数のキーワード(「男性」と「高齢者」など)は選べない。フリーワード欄に事項名を入れた検索も可能だ。例えば「ホーリー」と入力し、各地のホーリー祭の比較もできる。フリーワード欄の?マークをクリックすると検索用語を探すヒントが表示される。既存のキーワードとフリーワードの組み合わせ検索も可能である。

データベース上の写真の転用にはみんなの許可が必要だ。みんなの民族学資料共同利用窓口までお問い合わせいただければ幸いである。データベースにはまだ場所が特定できないなど情報が不完全なものもある。今後もより良いものを目指して努力してゆきたい。ご覧いただいで気づいた点をご指摘いただければ大変ありがたい。

ラクダ部隊と「小学生新聞」

上羽 陽子 民博人類文明誌研究部

「ラクダ部隊の写真が手元がない」。みんなの研究者が連載をしている「毎日小学生新聞」で調査地のラクダの毛利用や、今後のラクダ飼いの暮らしについて書くとしたときだった。昨年、作成に協力した「沖守弘インド写真データベース」を思い出し、「ラクダ」と検索してみた。すると、インド西部のラージャスターン州のラクダ市やお祭り、ラクダの飼養などの写真のなかに、ラクダ部隊の写真を見つけた。

インドはヒトコブラクダ飼養圏の最東に位置し、その数は約三八万頭といわれている(二〇一三年統計による)。わたしの調査地、インド西部グジャラート州カッチ県にも多くのラクダ飼いが住んでいる。ラクダのオスは、乾燥した地域において自動車やトラックの代わりに、運搬用として使役されてきた。現在は、舗装された道路が増え、自動車が走れるようになったが、燃料代の方が高くなってしまいう安価な商品作物などは今でもラクダの後ろに台車を付

けて運んでいる。

統計によると一九八〇年以降、インドのラクダの飼養数は徐々に減ってきているが、今でも一定量は飼養され続けている。理由には、ラクダ部隊がある。インド西部の乾燥地帯は、パキスタンとの国境地域に位置するため、国境の警備時に警察や軍隊がラクダに乗って移動する必要がある。インドの共和国記念日には、軍隊による盛大なパレードがおこなわれる。沖氏が撮影した写真は、共和国記念日のラクダ部隊の写真であった。現在の過剰にラクダが装飾されている部隊ではなく、ラクダと兵隊による一糸乱れぬ行進の姿であった。まるで、有事があればすぐにでも駆けつけられるかのようである。

わたしの専門は、牧畜民の家畜の毛利用をはじめとした染織研究である。今ではなくなってしまう天然素材や、工業製品にかわってしまった当時の衣装や日常用品など、沖氏の写真には、手工芸に關係する貴重な写真もたくさんある。一方、七十年代から変わらぬ使い続けている染織品や道具が多くあることも写真から見とれるため、物質文化研究においても重要な記録である。多くの研究者にも活用していただきたい。



沖氏が撮影したインドラクダ部隊のパレード。撮影1984年 [X0300240] Photo by F.M.Oki